

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	谷木 由利
2. 審査委員	主 査：(鳴門教育大学 教授) 村井万里子 副主査：(兵庫教育大学 教授) 吉川 芳則 委 員：(鳴門教育大学 教授) 余郷 裕次 委 員：(鳴門教育大学 教授) 前田 一平 委 員：(鳴門教育大学 教授) 山森 直人 委 員：(神戸女子大学 教授) 堀江 祐爾 (第13条第3項適用)
3. 論文題目 小・中学校における発達過程をふまえた読書生活指導の構想	
4. 審査結果の要旨 教科教育実践学専攻言語系教育連合講座 谷木由利 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：平成31年2月23日(土) 13時30分～14時30分 場所：鳴門教育大学 人文棟6階 A3会議室 1. 学位論文の構成と概要 【論文の構成】 第1章 読書指導の動向と課題 第2章 大村はま「読書生活指導」の実際－「読書生活の記録」に着目して－ 第3章 大村はま「読書生活指導」の実践的提案－昭和50年版西尾実監修『改訂標準 中学国語一～三』(教育出版)に着目して 第4章 「これからの読書生活指導」への実践的提案 終章 引用・参考文献 資料 2. 審査経過 本論文は、現在一般的に行われている「読書指導」の現状と問題点をふまえ、これを克服するための「読書生活指導」の本質と機能、可能性について、歴史的遺産を踏まえ、理論的実践的に明らかにした研究である。 現代の「読書指導」は、「良書を多く読む」ことをめざして、指導者(司書教諭含む)による「良い本」の紹介や、読書単元の学習、関連する図書への誘い、学習者相互の紹介活動などを行っているのが現状である。この「本の紹介」レベルを脱し、子どもが「本のある生活」即ち「読書生活」(自ら本を選び、自分の必要に応じて様々な読書技術を身につけながら、主体的・日常的に「本を使って生きる生活」)を確立することが求められる。	

平成29年度版学習指導要領における「物の見方・考え方」や「深い学び」を身につけるには、ネットによる「調べ学習」がもたらす知識の量的拡大ではなく、著者の考えや専門領域の「まとまり」が形づくられている「本」による学びが不可欠である。

図書館司書による読書指導において広く知られる理論クルトー他2007『Guided Inquiry, Libraries Unlimited』では、子どもの「個人の世界」と学校の「カリキュラム」世界の隔たりを指摘し、両者を重ねつなぐ部分を「第三領域」と名付けて図書館司書の指導領域として位置づける。「個人世界＝第一世界」と「カリキュラム世界＝第二世界」との重なり「第三世界」は単純なベン図によって示されているが、本論文ではこの「重なり」を横から立体的に見て実際には大きな空隙のあることを明らかにし、そこに緻密に計画された「読書生活指導」のシステムが必要であることを指摘した。この「第三領域」を埋める稠密なシステムこそ、大村はまの「読書生活指導」の構造であることを突き止めた。(序章・4章)

「読書生活」の実際を中学生段階において実現した大村はまの「読書生活指導」は、その意義と価値、仕組みと内容、現代への応用の道筋を探究して、現代の教育実践に適用するには何が必要かを明らかにすることが重要である。本研究はこの課題に正面から取り組み、まず鳴門教育大学附属図書館「大村はま文庫」資料室所蔵「読書生活の記録」64冊を調査し、1967年度2年生、全8名分9冊に焦点を当てて、詳細な分析を行った。

その結果、中学校2年生が“本によって自らの生活を耕し生きる力の支えを得ていく”「読書生活」を、予めシステムとして指導者がどう築いて置き、実際に走り出してから子どもをどのように支え時機に応じて導いたかが明らかになった。研究方法として、質的研究「改定版グランデッドセオリー(M-G T A)を用い、「読書生活の記録」の「前書き・後書き」に焦点を当てて分析を行い、概念形成の実態を明らかにした。(第2章)

また、大村はまが「読書生活指導」を本格的に開始した1966年から1970年代にかけてその完成に至る経緯をたどり、大村はまが作成に関わった中学校教科書のうち、1975年版『改定標準中学国語』教育出版(1～3年)とその「解説本」によって、大村はま読書生活指導の「構造＝システム」を明らかにした。調査・分析によって明らかになった「読書生活指導」の構造を、上下を「ブックリスト」と「読書生活記録」に挟まれた「読書生活通信」から成るモデルに表した。さらに「読書生活通信」は9つのパーツ(モジュール)から成り、国語科授業本体の「読書単元」とつなぐ「てびき」の役割も果たす。子どもの「読書生活」は、教科書所収の「単元」と「読書生活通信」「読書生活記録」の三者が有機的に関連し、学期・学年の進行につれて緩やかに螺旋状に深まっていく指導過程が図示されており(「解説書」分析による)、これを細密に検討した。(第3章)

大村はまの実践は、西尾実(「生活」概念の重要性)、滑川道夫(情報時代の読書論)、阪本一郎(読書傾向の発達)等の理論に学び、倉澤栄吉の実践的示唆を得て1966年から始まり10年を経て1970年代半ばに完成した。その緻密な構造は、教科書の解説本をもってしても一般には理解しやすいとは言えず、『改定標準中学国語』教育出版1975改定版をピークにして教科書内の「読書生活通信」や「手引き」の扱いが縮小されていく。しかし、本研究によって「システムとしての読書生活指導」は、時代を超えた汎用性を持ちうるということが明らかにされた。谷木由利は、修士論文研究において「大村はま」国語科指導に取り組んで以来、中高における実践や、中小学校の管理職として学校全体の取り組みを進め、大村はま実践の理念・内容・精神(単元学習・新聞を用いた指導N I E・絵本を用いた指導など)を活かして実践を積み上げてきた。本研究の題目にある「小・中学校における発達過程をふまえた」は大村はま実践のみならず、自らの実践研究を貫くテーマであると捉えてのものである。

自らの実践経験をふまえ、「読書生活指導」を現代の実践現場において実現し軌道に乗せるには次の2点が必要なことを明らかにした。1つは、単なる読書ではなく「探究的読書」を育成しなければならぬこと。2つめは、大村はま実践のような優れた教員が単独で進めていくのではなく、教員・学習者を含め全体として「主体的かつ対話的・協同的な学習集団」が形成されねばならないこと、である。後者については、小規模校で著者自らが実践し、一定の手応えを得ている。これを「図書館司書教諭」及び小中高の教員養成においていかに一般化し時代的要求に応じて進化させていくかが問われている。(第4章)

(1)論文の意義・独創性

本論文の意義・独創性は、以下の4点にある。

1つは、全体を捉えることが困難であった大村はま「読書生活指導」のシステムを初めて明らかにした。2つ目は、実際の「読書生活記録」を用いて、生徒の読書生活の実態を稠密に明らかにした。3つ目は、「読書生活指導」のシステムを個々の教師が「カスタマイズ」していくのに必要な発達の観点や、理論の学び方、実践の展開の仕方を明らかにした。4つ目は、大村はまが試みて道半ばにとどまっている実践の汎用性への道を提案した。

(2)学校教育実践への貢献

(1)に示した本論文の内容は、これからの小中学校における読書指導を改革し、「探究的読書」と「読書生活指導」をつなぐ理念とシステムを提供していくことが期待される。

(3)社会的貢献

学校教育における「読書生活指導」の確立によって、社会に「本を用いて深く考える力」を浸透させることに貢献する。

(4)論文の発展性

「読書生活指導」を支える「書く」「読む」「話し合う」活動の深化、その指導を行う教師の導きとなる具体像を提供したことで、実践の進展に寄与する。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は 谷木由利 の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。